

7 文化

小樽の文化は、実に多彩と言える。小樽という土地は、その歴史を見ても、西洋の技術や文化から相当の影響を受けたところだと言える。しかしながら、小樽には数多くの古い和風建築が残り、洋風建築にも瓦屋根や和風建築の技法などが積極的に使用されている。つまり、和と洋の中で良いと思われたものが選ばれたり、両方を折衷した形になっている。また、小樽文化は、北前船で流入してきた人たちの出身地文化、職種、社会階層などによって彩られている。

文明開化時代の文化：西洋の建築、生活様式、人力車など、西洋文化や洋と和を折衷した文化が定着した。

出身地文化：商人たちがゆかりのある関西、北陸、東北文化などを中心に、様々な場所から来た人たちによってもちこまれた文化が息づいている。

旦那文化：商業の成功からもたらされた財により、豪傑な文化が育った。邸宅内に本格的な能舞台をつくった岡崎家のように、人々に楽しみを与える旦那の心意気が発揮された。

労働者の文化：日々、身体を酷使し労働をする人たちの切実な状況や訴えが、芸術、文学などに大きな影響を与えた。

漁師の文化：漁師が作業の士気を上げたり、息を合わせたりするために歌った沖上げ音頭は市の無形文化財に指定されている。

北前船の文化：印、引札、船絵馬、船簞笥など、北前船の繁栄や様式を象徴するものが各所に残っている。

職人文化：熟練した技で行う根気のいる物づくりが、ガラスなどの工芸品に発展した。

飲食文化：寿司、菓子、そば、ビール、アイスクリームなど、各地から持ち込まれたものが定着し、多彩な食文化となった。歴史の古い日本酒はもとより、地ビール、小樽ワインなども積極的に開発された。

花柳界文化：一時は500とも600とも言われた芸者たちが、剣を競って豪傑な男たちの疲れを癒した。

宗教との関わりにおいては、神社、寺などが多く、北前船による危険な航海の安全祈願などを通して神仏に頼る気持ちが深まっていった。西洋人が早くから入った土地だけに、キリスト教会も早期に作られた。

寒い冬に銭湯で身体の芯から温まることが習慣づいた。現代では、「小樽雪あかりの路」という、「灯」が人をつなげる国際文化交流も、小樽を象徴する風物詩として加わった。

小樽という土地では、このような多彩な文化を楽しむことができる。現代日本に生きる私たちが、外国との活発な国際交流をしながらも、自分達が継承してきた独自の文化を大切にするという姿勢を、小樽という土地は見せてくれる。

かつてアメリカで、民族の個性が溶けてしまったメルティングポットのような社会ではなく、お互いの個性を主張するサラダボールのような社会（サラダはトマト、レタス、きゅうりなどがそれぞれ自己主張をしている）を目指す必要があるということがしきりに唱えられたことがあった。日本も民族的、文化的に単一ではなく、各地で様々な地域文化が生まれ、刺激し合ってきた歴史がある。お互いの個性を尊重し、サラダボールのように調和のある社会を日本もつくっていくとすれば、古くからそのような状態にあり、今でもそうした流れを受け継いでいる土地として、小樽が教えてくれることは多いと思う。時代や文化がうまく交流しているのが小樽文化。

「小樽には 時と文化の 交差あり」



人力車

(写真提供・小樽ジャーナル)